

宗教心理学研究会ニューズレター

第33号 2022.3.31

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

第18回研究発表会報告	報告 藤井修平	1
第18回研究発表会 振り返りミーティング報告	報告 西脇 良	6
日本心理学会第85回大会公募シンポジウムを終えて	大橋 明	9
「新たな連携・協働」を試みる際に注意すべきこと		
—自文化中心主義から考える—	ムスリン・イーリヤ	12
Relationship between science and religion: Deconstruction of Judeo-Christian framework		
—「科学 vs. 宗教」についての考察—	Masami Takahashi	15
応用心理学の立場から見る宗教と心理学の連携可能性—互いへの期待を考える—	今城志保	17
『宗教心理学的研究の展開(18)—宗教, スピリチュアリティを追究するための「新たな連携・協働」の試み—』—ディスカッションを通じて感じたこと, 考えたこと—	太田俊明	18
「宗教」—アンケート調査の継続課題	ミカエル・カルmano	21
「宗教心理学的研究の展開(18)」のディスカッションに参加して	河村 諒	22
日本心理学会第85回大会シンポジウム宗教心理学の研究の展開(18)—宗教, スピリチュアリティを追究するための「新たな連携・協働」の試み—の振り返りミーティングに参加して	壽崎かずみ	23
宗教性・スピリチュアリティの操作的定義に関わる議論について	辻本 耐	25
「宗教」と「心理学」の往還、橋をかける宗教心理学研究	森本真由美	26
事務局からのお知らせ		28

第 18 回研究発表会報告

日本心理学会第 85 回大会公募シンポジウム: 宗教心理学的研究の展開(18)

—宗教, スピリチュアリティを追究するための「新たな連携・協働」の試み—

報告 藤井修平(東京家政大学)

本稿では、2021年9月1日～9月8日に明星大学(オンライン)で開催された日本心理学会第85回大会において、公募シンポジウムとして発表された宗教心理学研究会第18回研究発表会について報告を行いたい。昨年に引き続き、今

年もオンラインでの開催となったため、シンポジウムは事前に録画を行い、編集した動画を提出するという形式をとった。

今回のシンポジウムは、日本宗教研究諸学会連合研究奨励賞および、現在進行中の国際共同

研究プロジェクト「ユダヤーキリスト教的文脈の脱構築を試みる宗教性／スピリチュアリティにおける実証的研究」との関わりで企画されたものである。前者は松島先生が研究代表者で、藤井が研究分担者、ムスリン先生とタカハシ先生は研究協力者となっている。同奨励賞の研究計画においては、宗教学と心理学の学際的共同研究を促すための環境の構築および心理学的手法による宗教の学際的研究の実施が計画されており、このうち前者の、心理学と宗教学の共同研究のための基盤を整えるという目的が本シンポジウムの基本姿勢となった。それに加え、国際共同研究プロジェクトに対しても目を向けるために、そちらに関わっておられる大橋先生と西脇先生にも参加していただくことで、本シンポジウムの形が整えられた。

1. 企画説明 松島公望(東京大学)

はじめに企画代表者および司会の松島先生から、シンポジウムの企画説明が行われた。「宗教」および「スピリチュアリティ」を捉えることは困難であるため、実証・概念・現場それぞれが「新たな連携・協働」を行うことが必須であり、今回のシンポジウムの目的も、そのような連携や協働のための方法を模索することにある。それぞれの領域には、心理学などが調査・実験を行う(実証)、宗教学などが概念について深く考察を行う(概念)、データから見えてきた現象を宗教界や福祉、教育の現場での実践に役立てる(現場)という役割があり、それらの間で連携を行うことによって、「宗教性／スピリチュアリティ」を多角的に捉えることができる。そのようにシンポジウムの趣旨が説明された上で登壇者の紹介が行われた。そして最後に、日本において実証的宗教心理学が活発でなかった理由として、宗教／スピリチュアリティに興味がないか、たとえ興味があってもどのように、どうやって研究すればよいかわからなかったというものが挙げられた。そのような研究方法の難しさがあるため、その問題を解消するためにも、今回のシンポジウムは企画されると説明された。

2. 藤井修平(東京家政大学)「宗教学と心理学の連携に際しての問題とその解決策」

藤井の発表では、宗教学理論研究の立場から、宗教学と心理学の連携の際に生じる問題の特定とその解決策の提示を行った。そのような問題として、以下の3つが挙げられる。第1に、宗教を扱う心理学的研究の中に、疑わしいものが存在している点。具体的な例としては、超能力を実証しようとするものや、遠隔地への祈りの効果を検証しようとするものがある。こうした研究に対しては警戒するのも当然のことであるので、宗教心理学はそれらとの差異を明確にしなければならぬだろう。第2に、日本国内で「宗教」があまり目立つことがなく、社会や人々に対してあまり影響を与えていないと考えられている点が挙げられる。そして第3の問題は、宗教学の多くの研究者が心理学のような対象の定量化を行う研究に抵抗があり、そのような方法では宗教は把握できないと考えている点である。

これらの問題に対して解決策を提示しつつ、どのように研究を進めるべきかの提案を行った。第1の問題に関しては、研究の基本姿勢として特定宗教の正しさや、神や幽霊などの存在を示すことが目的ではなく、あくまでそれらに関わる人間の心と行動の解明が目的であることを明示する必要がある。その上で第2の問題に対しては、海外とりわけ米国に目を向ければ、宗教は政治などにも大きな影響を及ぼしており、米国心理学会でも積極的に研究されている。その上で、「宗教」の捉え方を見直すことでも解決が可能と考えられる。宗教はしばしば特定の集団に所属することと捉えられがちだが、これまでの研究を踏まえるならば、必ずしも組織的なものだけが宗教ではない。宗教の幅広い捉え方を採用すれば、初詣や墓参りなど、日常的に行っていることの中にも宗教的な要素が見出せ、宗教はよりわれわれの身近に存在するものとなる。さらに第3の問題に対しては、宗教でない対象の研究と共通する側面に光を当てることが重要である。近年では、心の理論、アニミズム、擬人観などのように、非宗教的な思考や行動に用いられている能力や傾向性が、同時に宗教的な思考や行動にも

用いられていることが明らかとなっている。こうした宗教的なものと非宗教的なものに共通する要素の研究はより心理学一般との親和性が高いため、これらに着目することで「宗教は研究できない」という見方を払拭できると思われる。

このように、より幅広い宗教の概念を用いることと、宗教に関連する能力や傾向性にも目を向けることで、宗教心理学が包含する対象はますます拡大し、新たな研究の可能性が拓かれると述べている。実際に、宗教的事象といえる疑似科学、妖怪・お化けおよび不思議現象や、宗教に関連する能力である畏敬の念、心の理論などの研究は日本でも見られるため、そうした研究との連携も大いに有意義なこととなるだろう。

3. 大橋明(鈴鹿医療科学大学)「超高齢社会において宗教心理学が取り組むことのできる新たな連携と協働—老年学・老年心理学から—」

大橋先生は老年学・老年心理学の視点から、高齢者を対象とした宗教性／スピリチュアリティの研究について発表された。前提として、現在の日本社会は65歳以上の人口が28.7%を占め、今後さらなる割合の上昇が予想されている「超高齢社会」である。そうした中で、宗教的なものに対する研究も増加している。そのような研究として、精神的健康に関わる「老年的超越」の中に「宗教的もしくはスピリチュアルな態度」が含まれているという研究、85歳以上の超高齢者が死者や神仏などの存在への親和性を有しているという研究、祈りや礼拝に参加していると精神的健康が維持・改善されるという研究、加齢とともに死への不安に対する「宗教的希望」の緩衝効果が大きくなるという研究、向宗教性が高い高齢者ほど、自分が将来判断能力を失った際の意向表明であるアドバンスディレクティブに賛成しているという研究等が紹介された。これらを総合すると、高齢期に入ると見えないものへの親しみが増え、祈りやスピリチュアリティが高齢者の健康に大きな影響を与えているということが言える。

これらの研究の概観を踏まえ、新たな連携・協働の際に必要なことについて考察が行われた。その際は、概念から実証を通して現場に至る流

れと、その逆の流れの双方を考慮する必要がある。前者においては、概念を尺度等に落とし込む際に失われるものがないか注意すること、実証において扱った尺度等は必ずしも現場の状況と対応するとは限らないので、それが現場で援用可能なように工夫することが挙げられた。また現場の側からの流れにおいては、現場で見られる事象を丹念に収集し、その結果を実証に反映することおよび、ある側面について繰り返し研究し、実証の結果を概念とすり合わせる事が挙げられた。このように、それぞれの領域の専門家同士が議論を行って、領域間の風通しを良くすることが、連携・協働の際にとっても重要となると提案された。

大橋先生のご発表は、超高齢社会における宗教／スピリチュアリティ研究の重要性を再確認できるものだった。一般に宗教への関心は青年期に低下し、その後歳を取るごとに増加すると言われているが、紹介された研究でもそのことが示されている。いくつか見られた死への不安に関する研究は、宗教をはじめとする世界観が死への恐怖を抑える機能をもつとする恐怖管理理論(存在脅威管理理論)と関わるものではないかと思われる。そうした点を含め、宗教／スピリチュアリティの精神的健康への影響は、高齢者においてより顕著となることがうかがえる。連携のために必要なことに関しては、概観された研究と現場との関連が特に重要なのではないかと思った。ここで挙げられている「1人での祈り(private prayer)」とは公的な祈りと対置される、部屋で個人で行い、神に直接語りかけるものだが、これはキリスト教特有の実践のため、そのままでは日本の事例には用いにくい。他方で、念仏を唱える、仏壇を拝むといった行為と共通点もあるため、それらを包括した概念も考えられるだろう。こうした点でも、3領域の連携で新たな見地をもたらすことができるように思われる。

4. 西脇良(南山大学)「小学校の現場からみる宗教心理学との新たな連携・協働」

西脇先生のご発表では、私立小学校教育の現場に関わる立場から、その現状の紹介と、連携・

協働の可能性についての提案がなされた。西脇先生は南山大学附属小学校に設立当初から関わっておられ、長い間校長も務められていた。現代でも「宗教」の時間や聖歌隊の指導などをされている。本校はミッションスクールの位置付けで、英語学習や海外との交流、家庭との教育連携にも力を入れている。新型コロナウイルス感染症の拡大のため 2020 年の春には休校期間があったが、そのような状況下での生徒の様子や、感染対策についても紹介がなされた。また宗教教育の側面からは、学内で 1 日 3 度の祈りを行っているほか、宗教行事も催される。宗教の時間においては、「開かれた宗教性」として、キリスト教に限らず他宗教も含めた教育が行われている。そのカリキュラムは、「聖書の学び」「キリスト教道徳」「行事への取り組み」「マナー・作法」「他宗教の学び」を中心に構成されている。

このような現場の立場から、新たな連携・協働の可能性について提案がなされた。第 1 のものは、研究知見を現場に提供しうる可能性である。現場の多忙さゆえに困難もあるが、それでも教員研修や教材開発において、これまでの研究知見を役立てることができる。また第 2 の可能性としては、教育実践上の連携が挙げられる。心理的困難を抱えている子どもに対しては、校内だけでは解決は困難なので、心理職や福祉職との連携が提案されている。また学校のチャプレンを通じた問題への対処や、スピリチュアルケアが可能な専門家との連携も期待されている。

西脇先生のご発表は何より、キリスト教系学校の状況についてつぶさに知ることができた点で貴重だった。キリスト教系学校は日本国内に 600 校以上存在するが、南山大学およびその系列の幼稚園・小学校・中高はカトリックの神言修道会が運営している。修道会が母体となっている学校は上智学院(イエズス会)、暁星学園(マリア会)、白百合学園(シャルトル聖パウロ修道女会)、神戸海星女子学院(マリアの宣教者フランシスコ修道会)など多数存在し、教育界において大きな役割を果たしているといえるが、その内実、とりわけ初等教育の様子を目にすることはほとんどないため、まさに現場を知ることができて有意義だっ

た。そのような現場との連携として、教員の研修にこれまでの研究成果を活かすことや、さまざまな心のケアを行う専門家が、学校に参加する可能性が挙げられていた。いずれも外部から学校へという流れだが、それとは逆の、教育現場で得られた知見を研究の場で発信するという流れは、まさにこの発表で実現されていることと思われる。大橋先生もおっしゃっていたように、そのような相互的な流れが継続的に存在することで、各領域の連携はより円滑になるだろう。

5. ムスリン・イーリヤ(立教大学)「『新たな連携・協働』を試みる際に注意すべきこと—自文化中心主義から考える—」

続くムスリン先生は、新たな連携・協働の際に注意すべき点について、宗教学の立場から考察されている。第 1 に指摘されるのは、文化の違いや宗教の多様性に目を向けることである。宗教学において中心となっているのは米国での研究であり、そうした状況に起因する問題が生じうる。とりわけ宗教が対象の場合、しばしばキリスト教が念頭に置かれることになり、「神」であれば全知全能の唯一神を指すものになるなど、キリスト教的バイアスが大きい。そのため、欧米の自文化中心主義的な研究をそのまま輸入せず、適切な修正を施すことが必要となる。第 2 の点は日本における宗教概念についてである。日本語でも、体系的で組織的なものが宗教とみなされる一方、神道や祖先崇拜はあまり宗教とはみなされないことが指摘されている。しかし宗教学においては「宗教」をより幅広く捉えており、組織的なもの以外についても宗教とみなすことで、事象をよりの確に捉えることが可能となる。他方で第 3 の注意点として、欧米との差異を強調するあまり日本人が特別であるという見方に陥らないようにしなければならない。日本の宗教は寛容である、エコであるといった「日本人論」は多数見られるが、欧米と異なるからといって日本人の宗教観がユニークだということにはならない。一般に何か特殊だというのは主観的な評価であり、文化的民族主義と結びつくものである。

こうした点を踏まえ、日本と欧米との文化的相

違を十分意識し、日本の文化的文脈により適った尺度や質問紙を作成すること、より幅広い宗教概念を対象とし、非組織的な宗教も対象に含めること、日本特殊論の危険性を自覚し、特定の民族の宗教性に対して価値判断を行わないよう心がけることの3点が、連携・協働の際の注意点として挙げられている。

ムスリン先生のご発表は、宗教学的な観点から宗教心理学的研究を批判的に検討することによって、陥りがちな誤りを指摘するものである。その中心は「宗教」とは何かについてで、このような視点は宗教概念批判と呼ばれている。そこでの重要な指摘は、宗教の概念が決して中立・普遍的なものではなく、学者によって形成されるものであるゆえに、それが形成された文脈に由来するバイアスが存在しているという見方である。そしてそのバイアスの最たるものが、発表で言及されていたキリスト教的バイアスなのであり、それに対して日本の文化的文脈を反映した宗教概念を用いるよう提案されている。しかしその上で、そのような相対主義・文脈主義的視点が極端になると、また別の問題が生じることが指摘されているのが興味深い。それが日本特殊論であり、欧米と日本は異なるという見方が行き過ぎると、客観的なレベルを超えたものとなり、新たな自文化中心主義が生まれることになる。それゆえに一般と個別、それぞれの視点の長所と短所を理解し、バランスを保ちながら宗教に対してアプローチすることが最も重要なのではないかと考えた。

6. 指定討論:タカハシマサミ(イリノイ州立ノースイースタン大学)

最後に指定討論として、タカハシ先生よりこれまでの発表を踏まえてのまとめが行われた。今回のシンポジウムのテーマは宗教と科学の分野の対峙であり、宗教は信仰が基準であり、科学は実証が基準だといえる。3つの領域に関しては宗教の側には現場が、科学の側には現場と実証が、両者が重なる点には概念および理論が置かれている。さらに宗教学と心理学の関係性を考えると、個々の研究は概念・理論とデータ・観察の軸の上に位置しており、同じ心理学の中に

も、精神分析のように前者を優先するものと行動心理学のように後者を優先するものがある。宗教心理学はこれらの幅広い領域にまたがって存在しているといえる。

そのように全体を把握した上で、個々の発表の整理とコメントが行われた。藤井発表では3つの連携の問題点を指摘しているが、そのうち方法論の量的・質的研究の対立について、実証的研究は量的なもののみ存在しているわけではなく、質的研究も実証的に行うことが指摘された。大橋発表に対しては、米国では宗教の状況と高齢化の状況が日本と異なっているので、研究を参照する際には注意が必要であることが述べられた。西脇発表については、教育現場では宗教心理に関する研究が多数なされてきたが、それぞれが独立してしまっていて体系化がなされていないために、それらのデータベース構築の必要性が課題として語られた。最後にムスリン発表に関して、文化や言葉の壁に留意することに賛同がなされた。寿司が海外において大きな変化を遂げているように、スピリチュアリティも文化が違えば全く変わってくるのである。

これらの点を踏まえた上で、シンポジウムの総括として、連携・協働の際に念頭に置くべきことが3点挙げられた。第1の点は、宗教心理学における概念にあまり一致したものがないので、論文上での概念定義を明確に示して、結果だけが一人歩きすることがないように注意することである。2点目は、一般の人々が用いている概念定義との乖離が起らないように、そうした一般概念とのすり合わせを行うことである。3つ目の点は、下位尺度等を用いた「変速スライド方式」によって概念を構成するなどして、概念の共通理解をより柔軟なものとする事である。最後に、本シンポジウムで述べられている連携・協働の具体案として、現在準備が進められている「ユダヤ・キリスト教的文脈の脱構築:宗教性とスピリチュアリティのプロジェクト」の計画が提示され、シンポジウムが締めくくられた。

タカハシ先生が示された宗教学と心理学の関係の理解は、たいへん興味深かった。ただ最初の宗教・心理学・宗教学の関係性の図には少々

気になるところがあり、心理学と宗教の関係であれば科学と宗教と呼べるかもしれないが、心理学と宗教学の関係をそのように分類するのはどうだろうか。少なくとも宗教学は信仰が基準ではなく、そのことによって宗教自体と距離を置いている。他方で宗教学と心理学の関係に関する2つ目の図は、心理学といえども必ずしもデータ・観察がすべてではないことがわかり、とても有意義だった。

シンポジウム全体のまとめとして述べられた3点は、いずれも概念の扱いに関係するものである。ムスリン先生のご発表でも指摘されていたように、宗教を研究する際に諸概念をどのように定義し、扱うかということはきわめて重要なことであり、宗教学がこれまで行ってきたのも、宗教に関する概念——宗教に加え儀礼、神話、呪術、聖なるものなど——を検討し、ブラッシュアップすることだといえるかもしれない。ゆえに、そうした概念の検討の重要性が確認できたことは、心理学と宗教学が協働を行うことの意義を多少なりとも示せたことになるだろう。

以上が各発表の報告となる。冒頭でも述べたように今回のシンポジウムは2つの研究計画の一環の形をとっており、その中でも日本宗教研究諸学会連合研究奨励賞についてはこちらから研究計画を提案させていただいたこともあり、個人的にはまさに意図した通りの議論を行うことができた。ムスリン先生から宗教学側の重要な視点を提示していただけただけでなく、大橋先生、西脇先生、タカハシ先生からは心理学の側からの連携・協働の際に必要なことや注意点を指摘いただき、非常に有意義なものだったように思われる。またその過程で、心理学と宗教学の関係についても理解が深まり、今後のために有用な知見を得ることができた。今回の議論を基礎にすることで、両分野の連携・協働はますます実り多いものになると期待してよいだろう。発表で一緒にいただいた先生方とともに、このようなシンポジウムを企画し、まとめ上げて下さった松島先生には、惜しみない感謝の念を贈りたい。

第18回研究発表会 振り返りミーティング報告

報告 西脇 良(南山大学)

本稿では、すでに本ニューズレターで別途報告のあった、日本心理学会第85回大会公募シンポジウム「宗教心理学的研究の展開(18)ー宗教、スピリチュアリティを追究するための『新たな連携・協働』の試みー」を受けて、2021年9月26日にオンラインで実施された「振り返りミーティング」について、ご報告させていただきます。

1. 発表を終えての所感

ミーティング出席者は、シンポジウム登壇者6名を含めて14名でした。まず、参加者の自己紹介、シンポジウム企画者の松島公望先生による企画の趣旨説明が行われたのち、シンポジウム話題提供者4名(藤井修平先生、大橋明先生、ムスリン・イーリヤ先生、西脇良)および指定討論

者のTakahashi先生より、シンポジウム当日の話題提供や討論の概略を、あらためてそれぞれ発表していただきました。

次に、話題提供者4名がそれぞれ、発表を終えての所感を以下のように述べてくださいました。

(1)藤井修平「宗教学と心理学の共同研究のための基盤構築および実施」の試み:宗教学【概念(思想)】との連携・協働

宗教心理学の範囲は広く、ニューエイジ運動に端を発したトランスパーソナル心理学から、近年の宗教認知科学までである。その中で我々ほどのような立場で研究をすすめていくのか、立ち位置を明確にする必要がある。たとえば宗教認知科学は還元的で、宗教を集団としてみることは少

なく、人間の認知能力の側面からみていく。また、スピリチュアリティをカバーするののかも課題。さらに、研究の科学性や、特定の宗教への不偏といった基準を打ち出す必要があるのではない。

(2)大橋明「超高齢社会における新たな連携と協働の意義と可能性」:老年学・老年心理学【実証(データ)】との連携・協働

宗教については門外漢であるところから、自分に馴染みのある方法論に寄りかかってしまったり、自分流の理解をしてしまったりということへの反省がある。知らないからこそ自分の理解し易いように捉えてしまう、というリスクを回避しなければならぬ。

(3)西脇良「小学校現場から見た宗教心理学と新たな連携と協働の意義と可能性」:小学校現場【現場(実践)】との連携・協働

小中学校の道徳教育の内容、とくに生命や死の扱いについて、また「人間の力を超えた大なるものへの畏敬の念」概念に対する、宗教心理学研究／スピリチュアリティ研究からの応答が必要ではないかと感じている。実証的研究を行う側からの応答が必要である。

(4)ムスリン・イーリヤ「『新たな連携・協働』を試みる際に注意すべきこと—自文化中心主義から考える—」

心理学会の中で宗教心理学の魅力をアピールしようとする意図は理解できるが、今回はもう少し専門性のある内容での発表があるとよい、と自己反省を含めて感じた。また今回の企画のロジックとなっている「概念—実証—実践」は、外から見ると少し分かりにくかったと思う。

2. 質疑応答および自由討論

続いて、話題提供者の各発表と指定討論を受け、質疑応答や自由討論が行われました。ここでは、その主要なものをテーマ別に整理したかたちでご報告させていただきます。

(1)宗派学の捉え方

「宗教学には自分の宗派を第一と考える『宗派学』なる部門があるが、自文化中心主義との兼ね合いはどうなるか。」というフロアからの質問に

対してムスリン先生は、「私の本日の自文化中心主義に関する忠告は、あくまでも宗教の研究を手がけようとする心理学者への助言である」と答えられました。加えて、「客観的な学問としての宗教学をするなら自分たちこそ正しいと自分たちの世界観あるいは宗教観を絶対視することは相応しくないとされる。宗教学者であり宗教家であるということも当然可能であるが、そのような方たちがみずからの信仰の正当性を主張することは理解できるし、許容できる。そして、厳格な科学としての宗教学を目指す側と特定の信仰を土台に宗教学研究を行う側が協力する余地もあると思われる」とも述べられました。

ここで藤井先生も議論に加わり、次のように述べられました。「宗派学は自文化中心主義に入らないのか」という質問に対して、ムスリンさんの回答を補強するものとして、『自文化中心主義はあたかも中立かのように装っている分野に隠れて存在する場合に問題なのであって、それが明示的な宗派学にはそうした批判はあたらない』と答えられるかなと思いました。」

(2)暦法と宗教との関係

次に、「いわゆる『暦』や『暦法』などは、宗教と関係があるのか。」というフロアからの質問に対して藤井先生は、「聖なる時間と空間」を宗教の重要な契機としたエリアーデの例を出され、人類は文化の中で時間をコントロールしてきたし、その文化的営みに宗教もかかわってきたと考えられる、と回答され、宗教が暦法にも関与してきた、という見方を示されました。

(3)尺度を使用する際の柔軟性

さらに、Takahashi 先生のご発表における「下位尺度等を用いた変則スライド方式の尺度の利用」について、「同じ尺度でも集団が変わり因子構造が変わっても柔軟に対応していこうという趣旨であったが、尺度の不安定性の問題が生じないか。そもそも宗教性因子は多因子構造なのか、単因子構造なのか。集団で構造が変わるなら単因子構造のほうが、使い勝手がよいのでは。」という質問がフロアからなされました。これに対して Takahashi 先生は、尺度を柔軟に使用すべきという点はその通りで、「変則スライド方

式」はその一例として示した、と回答されました。その一例として「包括的なスピリチュアリティ尺度」を挙げられ、包括的なスピリチュアリティ尺度を用意し、その尺度の定義がコンテキストによって変わっていくという前提であれば、それはそれで一つの柔軟な方法なのではないか、との見方を示されました。

またこれを受けて松島先生も、宗教という掴みどころのないものを方法論によって或る側面に閉じ込めてしまうと、従来の研究が見落としてきたことの繰り返しになってしまうので、尺度使用については柔軟に考え、チャレンジしてもよいと思う、との考えを示されました。

(4)心理学が提供する「データ」

そして議論は徐々に、宗教学や神学からは心理学はどのように映っているのか、といった話題にすすんでいきました。

まず Takahashi 先生が、宗教も心理学も、不明確・不明瞭で、流行がある、という点で同じであり、心理学は「こころ」を対象とし、宗教心理学は「宗教」を対象としているということである、と述べられました。これを受けてフロアからは、たとえば神学の立場から心理学をみると、「心理学はあやしい」「こころを理解していると思っている人々だ」「心理学の実証で分かるはずがない」という見方が存在するが、個人としてはどの立場も重要であると思っている、という意見があがりました。

これに対して松島先生は、心理学における質問紙法等の量的研究に対しては、質的研究に対して肯定的なものに比して、外部からの懐疑というものは実際にある、と応えつつ、「実証的／経験科学的」な側面は他の人文科学にもあるので、今後は心理学が扱う「データ」とくに数量的データについて、丁寧に説明していく必要がある、との考えを示されました。

また、一般の人は「データ」というと社会学的なアンケート調査による「意見」を想定するが、心理学では心理特性までも質問紙法データを用いて明らかにしようとするので、両者の違いが理解されていないかも知れない、というフロアからの意見もみられました。

(5)宗教心理学への期待

ミーティングの終盤では、宗教や宗教性を対象とする宗教心理学への期待は何か、という論点を中心に意見交換がみられました。

心理学の中で宗教、信仰心、スピリチュアリティを研究することは意味あることであり、たとえば、自分の人生の最期が近づいてきたときに人は何を思うのかと問うと、これまで宗教が人々に多くの示唆を与えてきたことは事実であり、そこに研究の意義がある、という意見や、宗教研究者が「心理学」に接近するとき、そこにどのような期待があり、どのような研究が望まれているのか、という問いも出されました。

これに対して藤井先生は、宗教学分野で近年「テクノアニズム」が話題になり、日本のロボット開発の進展と宗教とを結びつける議論がなされていることを紹介され、たとえばこの「テクノアニズム」の議論のように、或る概念が存在するか否かといった、話し合っても結論が出ないものに対して、宗教心理学の側からしっかりとしたデータを出していく、というところは期待されているのではないだろうか、と応じておられました。

またフロアからは、企業における「ストレスマネジメント」と宗教との関連性について問題提起がなされました。アメリカでは、人々の文化の中に宗教が根づいており、企業内で宗教が話題になることに大きな抵抗感はないが、日本では、一般の人々が考える「宗教」(ちょっとした信仰心、迷信など)と、宗教心理学が扱おうとしているテーマが素直につながらない、という印象である。日本でも「信仰心はありません」と言っている人々が企業の中でストレスマネジメントとして(宗教的なものを)利用している、という現象もみられるので、そのあたりも宗教心理学が研究する余地がありそうだ、との指摘でした。

3. まとめ

今回の振り返りミーティングでは、少人数ながらも、参加者の内訳として「宗教者(僧侶・信徒を含む)とそれ以外の方々」、「宗教学研究者と心理学研究者、またそれ以外の専門の立場の方々」の構成がみられ、宗教学や心理学をめぐる

て多様な意見や見方を持たれた方々が参加しておられました。また、ミーティングの司会をしてくださった松島先生も、オープンエンドな形式での意見交換の場としてミーティングをリードしてくださいました。話題提供や指定討論に対する質疑応答から始まり、そこから展開してより多様な視点からの意見交換が活発にみられたのは、こうしたことの結果であったように思います。そこにはオープンな対話的態度、すなわち宗教心理学が

今後、宗教学、心理学の他の部門、学校その他の現場、他の宗教との「新たな連携・協働」を試みる際に必要な対話的態度が、たしかにありました。そしてこのミーティングは同時に、第18回研究発表会の企画者である松島先生が提唱された、[概念(思想)—実証(データ)—実践(現場)]という、今後の宗教心理学の包摂的な研究姿勢が反映されたものでもあったと思います。

日本心理学会第85回大会公募シンポジウムを終えて

大橋 明(鈴鹿医療科学大学:非会員)

またまた公募シンポジウムの一員としてお声をかけていただき(松島公望先生に唆されて、とも言えますが)、非会員の分際にも関わらず3回目のコメントを執筆することになりました。これまで、①日本で高齢者を対象とした宗教性・スピリチュアリティ研究は活発に行われているのかどうかを示すこと、②生命倫理と宗教の関わりを高齢者心理学の立場から論じること、といったお題が松島先生から与えられてきました。そして今回は「超高齢社会において、ケアや死の問題などの宗教・宗教性に関わる問題がますます深刻になっている状況の中で、いかに『概念⇄実証⇄現場』との連携が必要であるかについて、老年学、老年心理学の立場から大いに語るように」とのことでした。「大い」には無理にしても、「こじんまり」とお話ができればと思ってお受けした次第です。

発表内容の詳細は藤井修平先生によるご報告、西脇良先生による振り返りミーティングのおまとめの中で極めて丁寧に記していただいておりますので、ここでは今回の発表を通して感じたことを3点記したいと考えています。1つは発表の内容について、2つ目は動画という手法とその作業について、そして3つ目は振り返りミーティングについてです。

1つ目の発表の内容ですが、最大の難問は『概念⇄実証⇄現場』といった連携の意義をいかに表現したらよいのかという点でした。まずは『実

証⇄現場』の『実証⇄現場』についてですが、これは自分でもそれなりに考えてきたことでした。研究が研究で終わってしまうのではなく、自分の研究結果を臨床(現場)にどのように伝えていかかということで大事にしなければならないことは、現場の言葉に落とし込む作業だろうと思います。反対に、『実証⇄現場』、つまり臨床現場で見聞きしたことを研究に集約する取り組みは、私たちが日常生活を当たり前のように過ごしている(⇄現場にいる)ということ、比較的行いやすいのかもしれません。

ただし、軸足が研究にある私は、現場のことを広範囲によく知っているわけではありません。高齢者を対象としている私ですが、地域社会で生活しておられる方やケアハウス・介護老人保健施設などにお住まいの方の様子をつまびらかに理解しているかというところではありません。従って、私個人が体験している「現場」はかなり限定されたものになることは否定できません。今回は「実証」の立場からお話するというものだったのですが、実証の立場は現場の立場の情報をいかに受け取り整理するかということも考えなければならないと改めて感じました。(なお、「実践のための研究をしなければならない」ということを申し上げたいではありません。)

『概念⇄実証』はかなり大変でした。心理学(実証)の立場は、理論(構成概念)があって、それを

観測変数というデータで捉えることができる形で用います。そういった状況に慣れている立場の者としては、実証が概念の考えを受け取る、つまり『概念⇒実証』ということは比較的イメージしやすいものでした。しかし、概念をきちんとカバーする観測変数を私たちは作り得ているのか、というところでムクムクと疑問が湧いてきたことも事実です。よく尺度作成などでは「内容妥当性を確認するために、心理学者 3 人で討議の上、尺度内容を決定～」などと記したりしています。また因子を抽出して「〇〇尺度」を作成した、ということも当たり前の展開です。もちろんこれは実証的研究のために不可欠な作業ですが、概念を観測変数に落とし込む時に、ズレは生じていないか、本当に概念が示す内容を押さえ切れているのかということ意識することは必要だろうと思うのです。「宗教観尺度」を作成し因子がいくつか出てきたとして、それで宗教観すべてを網羅できているのかということ、そうではないと思います（もちろんそのことを理解した上で研究をしているのですが）。この問題をクリアするためには、やはり実証研究に取り組む時に、概念の立場の人にもきちんと指摘を受ける、という取り組みが不可欠であるように感じました。

もう一方の『概念⇐実証』は大変難しいものでした。実証の立場である自分たちが明らかにしてきたことを理論の人たちに受け取ってもらうようにするにはどうしたらいいのか、ということは、お恥ずかしながらあまり考えてこなかったように思います。私だけなのかかもしれませんが、実証の立場から臨床の立場に伝えることはできるような気がしても、実証の立場から概念の立場に伝えづらいという思いがあるのです。このモヤモヤ感は、私にとって貴重な体験でした。この場合、宗教のある側面について実証を多々繰り返していく中で、結果を洗練させていくことが求められるように思います。その中で、概念や思想に一致しない内容も出てくるかもしれません。その際には、概念の立場の方からは厳しいご意見をいただくことが必要でしょうし、一方で実証側もきちんと説明する必要があると考えます。

『概念⇔実証⇔現場』の整理は非常に困難を

極めたのですが、今回のまとめていく作業の中で実感したのは、宗教というとても大きく大きなものを扱うわけですので、「概念・実証・現場」いずれかひとつの切り口をしっかりと持ち、その知識や技術をきちんと高めることがまずは大切だろうということです。そのことで、自分の立ち位置と、他の領域の立ち位置の違いがより鮮明になるでしょう。

概念・実証・現場の人たちは、これまでこのような連携に取り組んでいらっしやったのか、お恥ずかしながら私は存じません。お互い「あいつらは自分たちと違う」と距離をとってきたところもあるのかなと思考します（私の無意識を投影しました）。そこで、この 3 つの立場をつなぐ仲立ち、「通訳」のような立場の人も大切だろうと思いました。あまりにも大きなものである「宗教」だからこそ、この間をつなぐ力をもつ人たちの存在が不可欠のように思います。たとえば、宗教家で心理学にも通暁している人、調査研究をしながら現場で活躍をしている人などが、その役割を果たして欲しいと感じました。

このように振り返ってみますと、今回の発表は私自身の立ち位置や、その立ち位置からできることやしなければならぬことは一体何なのかということについて考えさせられた、とても貴重な機会だったように思います。自分の立ち位置を明確にしつつも、他の領域について知識を深めていくことが、独善的にならないようにするためにも必要かもしれないと改めて感じた次第です。

続いて、2 つ目の動画という手法とその作業についてです。私にとって、Zoom での学会発表は初めての体験でした。今回は 5 月の初旬にシンポジウムのお話をいただき、6 月 23 日に採択通知が届けられ、7 月 20 日までに動画をアップしなければならぬとのことでした。また 7 月 11 日に動画を撮るということで、準備に 2 か月ほどしか猶予がありませんでした。従来は対面でのシンポジウムですから、最悪当日（9 月あたり）までにプレゼンテーション資料が間に合えばよかったわけですが、このような体験しかありませんでしたので、少しずつ準備をしつつも「まだまだ大丈夫だろう」などと高をくくってしまっていて、採択通知と同

時に締め切りをお知らせいただいた折に真っ青になったというのは秘密です。

日本心理学会では 2020 年度の第 84 回大会で Zoom によるシンポジウム配信がなされたようですし、私自身もその形式での講演やシンポジウムに視聴者として参加したことはあります。しかし、いざ自分が視聴される側に回ったことで、いやな緊張感の中にあることを意識せざるを得ませんでした。朝の民放ニュース番組で、外の景色を映しながら放送することはよくありますが、そこに私の大好きなミュージシャンが映り込んでファンの中では大ウケだった、ということをもとに思いました。ですから、録画の準備をする際も、背景にヘンなものが映り込んでいないか、雑然とした研究室内が映っていないかと、余計なところでエネルギーを使ったように思います。

また、「複製は禁じられている」とはいえ、いろいろな裏技を使って、資料や音声を視聴者に保存されることもあり得ることで。保存されてばらまかれる(!)ということが怖いのではなく(実はほんの少しは思っていました)、間違ったことを申し上げてそれが「正しい」ものとして理解される、またお話ししたことが曲解されたまま残る可能性があるということが一番怖いことでした。そのような意味では、「記憶が消えればそれで終わり」、つまり「その場限り」の発表ではあまり体験しなかった恐怖を感じながらの準備だったように思います。

Zoom では PowerPoint のスライドを共有画面とするわけですが、自分の顔がスライドと重なってしまうことがよくあることは皆さんご存知のことだと思います。今回の録画でこのことに加え、何かの不具合で顔が写らなかったなど、うまくいかないことも多々ありました。そこで藤井先生が画像の修正(切り貼り)をしてくださったことで、自分の顔でスライドが見られないという状況を回避することができました。藤井先生のお力がなければ、あのような立派な動画はできませんでした。

動画撮影は午前中から昼過ぎにかけて行われましたが、これは日本での話であり、シカゴ在住の Takahashi Masami 先生にとっては時差の関係で夜遅くの撮影となりました。本来就寝され

る時間がとうに過ぎる中、Takahashi 先生がずっと私たちにお付き合いくださったことは本当にありがたいことでした。

Zoom など遠隔による会議や学会は今後も増えていこうと思われま。わざわざ現地に集まらなくても発表ができる、皆さんとやり取りができるというのは非常に便利だと思います。ただ、それらを使いこなす技術を身につける必要があり、それが身につけていない者は取り残されるという不安も持ちました。このように、対面での発表では感じなかったことを感じざるを得ない、なかなか疲れる作業だった、これまでとは違う留意点があるということについて身を持って体験したというのが偽らざる気持ちです。

そして 3 つ目です。普段でしたら「シンポジウム終わった〜！」と開放的な気分になるものですが、さすがは宗教心理学研究会、そこで終わりません。Zoom による振り返りミーティングを行うこととなります。それこそ門外漢を自認しておりますし、宗教について知識がないと自覚している人間ですので、小さくなりながら先生方から次々に出されていくご感想やご意見、アドバイスなどを伺っておりました。自由な発言ができる場というのは本当にいいものです(そもそも学問とはそうあるべきですが)、『概念⇄実証⇄現場』という立場の異なるものを包括的に捉えようとするためには不可欠であるように思います。先に、「概念・実証・現場の人たちは、これまで連携に取り組んでこられたのか」などと血迷ったことを申しましたが、その答えがこの振り返りミーティングにあることを知り、いたく反省した次第です。

最後に、今回シンポジウムで一緒にさせていただいた先生方からいただいた刺激を少しだけ述べたいと思います(あくまでも大橋が感じたことです)。藤井先生、西脇先生、ムスリン・イーリヤ先生とは今回初めて一緒にさせていただきました。藤井先生は、心理学と宗教学の方法論の違いについて明解に論じておられることに代表されるように、話題をきれいに一刀両断する気持ちよさがありました。つまり、混乱しがちな宗教心理学という食材を丁寧かつ明確に切り分けることの重要性を教えてくださいましたように思います。西脇先生

は小学校という現場で行っておられる宗教教育を研究に紡いでいくことについて、温かかつ冷静なまなざしで語っておられました。現場というところで必要なぬくもりのみならず、一步離れて客観的に俯瞰する大切さを教えていただきました。ムスリン・イーリヤ先生は、欧米の思想をそのまま取り入れること、そして日本人のもつ宗教性があたかも特別であるかのように考えてしまうことに警鐘を鳴らしていらっしゃいました。私がどうしても自分の立ち位置で物を語ってしまっていること、その危うさを指し示して下さったように思います。Takahashi 先生とはもう長くお付き合いをさせていただいていますが、いつも私のような若造が思いつかない高所大所からの視点で、今後の方向性を明確に論じてくださいました。だからといって大雑把ではなく、実に細やかなご指摘もく

ださいます。バランス感覚の大切さを改めて教わった気がします。最後に松島先生は、いつものエネルギーあふれる勢いでこのシンポジウムを引っ張ってくださいました。ガス欠になられないか心配していますが、ひとつのことに好奇心と執念を持って継続することが、太い幹となり、つぼみを作り、そして花を咲かせることにつながることを具現化しておられると思います。

「新たな連携と協働」という話題提供のテーマでしたが、「新た」なことを提案できたわけではありませんでした。もう一度、学者としての基礎に立ち返ろう、というものが、自分の中でどどり着いた結論(?)だったように思います。感想が長くなりましたが、この機会をいただいたことに感謝しております。

「新たな連携・協働」を試みる際に注意すべきこと — 自文化中心主義から考える —

ムスリン・イーリヤ / ILJA MUSULIN (立教大学)

昨年の心理学会はオンデマンド方式であった為、相手の顔が見られないだけではなく、話を聞いてくださる方がいるか、いるとすればどなたなのかを知らずに発表を行う必要があったわけである。そのような中で宗教学と実証心理学の分野が今後共同研究を行う中でどのような問題点に注意すべきかについて論じてみた。注意すべき点は複数あるが、著者の発表の焦点は自文化中心主義の問題に当たった。

文化の違いや宗教の多様性に関する意識の重要性

自文化中心主義の問題は文化人類学や宗教学のほうで長い年月まな板上に上がっているが、所見の限り、心理学のほうではいまだに十分な認識がされていないようである。その穴を埋めるのが本発表の主な目的だった。

ゆっくりと考えてみれば、世界中の宗教がとても多様であり、宗教に関する研究を行う際に文化

的文脈に十分配慮をする必要があるということは明白である。とはいえ、実際に研究を行う際、なぜか、宗教的多様性や文化の違いは忘れられがちであり、つい自文化中心主義に陥ってしまうのである。それは主に二つのパターンがあると考えられるだろう。一つは輸入した自文化中心主義、つまり、無反省に受け継いだ相手(この場合、西洋諸国、主に北米の研究者)の自文化中心主義である。もう一つは研究者が自国で意識的または無意識的に吸収した自文化中心性である。

日本で研究を行っている我々を含め、様々な意味で全世界の学問がアメリカを中心に公転していると言っても過言ではない。そこで我々も、宗教性のタイプや宗教信仰と精神健康、あるいは宗教とアイデンティティ、宗教と人格形成、宗教信念と幸福・死への不安・意味など、様々な問題を研究しようとする際、まず北米の専門誌に目を向け、そこでの問題提起や研究方法、成果などを確認する。しかし、宗教に関して言えば、日

本の宗教を研究対象にしつつ、アメリカなどの西洋研究者のアプローチや方法の真似をしようとする場合には、我々は大きな過失を犯さざるを得ない。何故なら、例えば、アメリカの研究の中で利用された質問紙や尺度の内容に従いながら自らの日本についての研究を組み立てる場合、「神」と書いただけで、(対象者が日本のキリスト教徒ではない限り)我々はすでにアメリカの研究者と相いれない結果を得る方向に向かっているからである。

西洋の研究者が宗教研究を行う際に頻繁にイメージするのは、人間の能力や道徳性をはるかに超える全知全能で完璧な道徳者の神である。北米心理学の論文にその神のことが God と書かれるのは偶然ではない。その言葉を見れば、まず頭文字が大文字であることに気付くことができる。この書き方にはわけがある。神は非常に貴く、強力であり、人間とはかけ離れた存在であるため、最大の敬意を示す必要があるわけだが、その敬意、そして神が有する力と権威が絶大であること示すために「神」という名詞を大文字で書くのである。それから、英語などの印欧語の名詞には単数形と複数形があるが、ここで単数形の名詞が使われている理由は神が一つしか存在しないと信じられているからだ。英語の名詞には性別がないので、God と書いても信仰対象の性ははっきりしないが、名詞に性別が付くほかのほとんどの言語ではキリスト教の「神」は男性形になっている。

つまり、異なる解釈をしている神学者や聖職者もいるとはいえ、西洋では神は人々からかけ離れた、人間をはるかに超える唯一の存在、そして男性としてイメージされ、信仰されることが多い。しかし日本では、動物も、木々や稲などの植物(の霊)も人間も自然現象も神に成り得る。これだけ神概念が違えば、アメリカの研究者の尺度の中に出てくる神像、神との関係などに関する質問項目が日本で同じ意味を持ち、似たような研究結果を生み出すことは不可能である。

このことは、落ち着いて考えれば誰もが簡単に理解できるが、それにもかかわらず、我々は God が中心となるアメリカの専門誌の調査紙や尺度

をそのまま受け入れ、日本の現実を捉えきれない不正確で紛らわしい、もっと言えば、疑わしい研究に着手しがちである。学問的に厳格で日本の文化的な文脈に忠実な研究を行うために、北米心理学における自文化中心性や両国の文化の違い、宗教信仰の多様性に関する意識が必要だと思われる。

というのは、宗教の多様性に関する意識が不足して自文化または自信仰に引っ張られて God をあらゆる宗教信仰の原型あるいは本質として捉え、一神教を宗教全般と同一視するのが(一部の)北米心理学者が抱えている問題である。宗教心理学はプロテスタントの多い国であるアメリカで起こったものであり、北米の心理学者が自らの研究においてプロテスタント的な信仰を持つ対象者と接することが多く、心理学者の中には同様な信仰あるいはプロテスタント的な要素を含んだ宗教観を持つ調査実施者がいることを踏まえると、北米心理学においてプロテスタント的な発想を無意識か意識的に宗教定義や尺度などに反映した研究があることは不思議ではない。

だが、そのような概念を土台に据えた研究者の論文を宗教研究の権威として捉え、彼らの自文化中心的な考え方に基づいた研究手法や成果を日本に拠点を置く我々が無反省に、必要な変更を加えずに導入すると、文化的多様性に関する意識の欠如は我々の問題にもなる。知らず知らずのうちに偏った学問を輸入したということになるからである。

また、近年日本では「無宗教」というのは活発に論じられている。日本人が質問紙の項目に対し「宗教がない」と回答した場合は、これはどういう意味なのか、何の信仰もないという意味なのか、それとも、「特定の宗教に所属していない」または「特定の宗教を信じていない」という意味なのか。つまり、「無宗教」と名乗る日本人は果たして信仰がないのか。もしあるとすれば、それがどういうものなのか？また、これと関連して、日本人が「宗教」と言う際にこれは何を意味するかも検討されてきている。

そこで、一般の日本人は開祖を持ち体系的で組織された宗教である「創唱宗教」(例えば、キリ

スト教、仏教、イスラム教など)を「宗教」として認識しているが、逆に、(神道や祖先崇拜を含めた民間宗教のような)「自然宗教」を「宗教」として認識しないという見解が提示されている。あるいは、カルトに見られるようなコミット度の高い熱意に満ちた信仰や実践、頻度が高く規範やタブーの多い実践こそ宗教であり、よりコミット度の低い参加は宗教ではないという概念も日本人に浸透しているということも指摘されている。

しかし、そのような宗教概念は宗教学における宗教の学問的な捉え方とは異なる点に留意が必要だと思われる。宗教学では、確かに、普遍的に受け入れられている定義がないどころか、宗教が単なる西洋出自の(具体的な歴史を持った)概念(思考の産物)であるか、実在する現象であるかという論争さえ長年行われ、近年も激しさを増している。つまり、これは、分野の主要な研究対象について動かぬコンセンサスがなされていないということである。とはいえ、宗教学者の間では、宗教とは必ずしも団体だけのものではない、宗教とは必ずしも体系的で組織的なもののみではない、また、宗教信仰とは必ずしも一宗教の教理のみに限ったものだけではなく諸宗教の要素を含んだものでもあり得るという共通の認識が存在する。

そういう意味で宗教研究を手掛けようとする日本の心理学者が日本の社会に見られる宗教概念を意識し、それに引っ張られないのは重要であると思われる。

そして、日本の宗教心理学を含め、宗教的にも日本人が「特別である」という言説を目にすることはしばしばある。日本人はほかの民族より宗教的に寛容である、日本ほど諸宗教が平和的に共存する国はない、神道など日本の宗教こそ自然環境を大切に、エコに対する意識がほかの宗教より高いなどという議論である。このような議論は学術界では「日本人論」(あるいは「日本文化論」というカテゴリーに分類されることは多い。

上記では日本における「神」概念や日本人の宗教観はアメリカのそれと異なる部分があることを指摘したが、だからといって、日本人の神概念が特殊であり、日本人の宗教観がユニークであ

ると考えているわけではない。まず、ある特定の国あるいはある文化圏と異なるということは世界で唯一(ユニーク)であるということにはならない。というのは、動物や植物、風や雷のような自然現象、人間などが神として拜まれることは古くから世界中に見られる現象であり、現代でも日本以外の一部のアジアの地域やアフリカなどで見られる。

「特殊だ」、「特別だ」、「ユニークだ」、これらはすべてだいたい学問的な根拠のない(文化的民族主義と関係している)主観的な評価である。そして、宗教の心理学的研究を行う者はそのような、特定の国あるいは宗教の価値に関する主観的判断を意味し、優越感やナルシズムを表現するとも捉え得る形容詞を使用する必要がなく、客観的な学問を目指すなら、使用するべきでもない。

まとめ

著者の心理学界での「新たな連携・協働」を試みる際に注意すべきことに関する議論は次のようにまとめることができる。

1) 宗教に関する質問紙や尺度を作成する場合は、日本とアメリカ、東洋と西洋の文化的相違を十分意識し、日本の宗教や文化において培われてきた世界観や価値観を反映した、日本の文化的文脈により適った尺度や質問紙を作成する必要がある(学問的な西洋(アメリカ)中心主義に気を付けるということ)。

確かに、数量的研究の場合、尺度の信頼性を確保し、その妥当性を確かめるためには複雑な手順が必要で、時間がかかる。また、アメリカの心理学専門誌に対して文化的相違点を主張し理解してもらうことも、場合によっては、煩わしいやりとりを意味し、多少勇気も要るかもしれない。そのため、日本における宗教を心理学的な立場から正確に捉え、海外に伝える試みはかなりの努力や工夫が必要であろう。

2) 日本で一般的にありがちな(宗教イコールキリスト教や仏教のような組織的宗教、及び宗教イコール熱心なカルトないし新興宗教、宗教イコール特定の教団への所属・特定の教理への信仰と

いような)狭い宗教概念を離れ、非組織的な宗教や個人のモザイク的な宗教なども研究対象に含めること。

3)「日本人論」あるいは「日本特殊論」の危険性を自覚し、特定の宗教あるいは民族の宗教性に対し価値判断を述べることを避けるように心がけること。

これらのすべての点は自文化中心主義と関係しており、宗教学者と心理学者の密接な連携・協働によって克服し得る(あるいは、少なくとも、部分的に解消しうる)であろう。

参考文献

1. ムスリン・イーリヤ『近年の北米心理学理論における死と宗教—宗教学・死生学の立場から』(博士論文), 2015年。
2. 阿満利磨『日本人は何故無宗教なのか』, ちくま新書, 1996年。
3. 星野靖二「日本文化論の中の宗教・無宗教」, 西村明編『いま宗教に向き合う2—隠される宗教, 顕れる宗教—』, 187-203頁, 岩波書店, 2018年。

Relationship between science and religion : Deconstruction of Judeo-Christian framework —「科学 vs. 宗教」についての考察—

Masami Takahashi (Northeastern Illinois University)

ここでは今回のメインテーマである「宗教と科学(および心理学)についての関係」について後考し、さらに質疑応答で議論された「ユダヤ・キリスト教的枠組みからの脱構築」と「実証研究を行う宗教心理学者にとって宗教的専門知識は必須なのか」の2点について私見を述べたい。

宗教と科学(および心理学)についての関係

まず宗教と科学の関係だが、この二つの分野はまるで歴史という重力によって揺れ動いている振り子のようである。その歴史は天動説を科学的に説明しようとしたガリレオがローマ教会によって蟄居させられたあたりから始まり、その後ニュートンの科学革命によって振り子の錘は逆方向に振り切る勢いであった。心理学においてもこの勢いが行動心理学に繋がったが、その後の認知革命等を経て現在はより中間地点に戻りつつある感がある。しかしこの「対立構造」は未だに宗教と科学の関係を微妙なものにしているようで、特に心理学(科学)者の立場からは宗教のような得体の知れない、怪しい(いかがわしい?)概念には非科学的ニュアンスがあり、普遍性と一般化を追求する知的なエンタープライズに持ち込むべきでは

ないということらしい(これに対して宗教側も「科学ごときが宗教という崇高で畏敬に満ちた人間の行動を説明できるわけがない」という立場であろう)。

多少違った文脈ではあるが、興味深いことに15年程前にAPA 36部門で「スピリチュアリティ」をその正式名称に取り入れるか否かという提案がなされた時、この概念の非科学的ニュアンスについての同じような議論がなされていた。ご存知のようにアメリカでは早くから宗教に特化した心理学研究が行われており、すでに1976年には全米カトリック心理学会が「宗教問題に関心のある心理学者の会(PIRI)」と改名されAPAの正式な部門となった(1993年に「宗教心理学会」と改名)。ところが2005年頃から同部門の名称に「スピリチュアリティ」を入れるべきではないかという提案がなされ、2010年に再度スピリチュアリティの非科学性が問題になったのである(詳しくはPsychology of Religion Newsletter, 35(2)を参照)。当時の「反スピリチュアリティ派」の言い分は、現在の日本における「反宗教派」心理学者の意見と重なる部分がある。同派はスピリチュアリティの操作化が不十分なことに加えて

この概念を単なる流行りとみなし、さらにその概念定義が Spilka の言うところの「情熱的に曖昧(!)」「(it) embraces obscurity with a passion」であるため学術・実証的な研究対象にはなり得ないとしている。また、心理学を科学の本道(特に STEM 分野(科学・技術・工学・数学の略)の一環)と主張する分野全体のイメージにも悪影響を与えるというのである。

これに対しスピリチュアリティを宗教心理学会の正式名称に取り入れようとする「親スピリチュアリティ派」は、同部門を確固たる「家」と言う比喻ではなく、「テント」であるべきとした。テントは壁がないため天候次第では風雨にさらされる可能性もあり常に安泰とは言えないが、その主目的は多くの人々が集まれる包括的なものであるべきだとし、出入りが自由で各自が好きな角度から宗教やスピリチュアリティを研究すればいいとする。さらに「親スピリチュアリティ派」は年々爆発的に増加しているスピリチュアリティ関係の実証研究をあげ、その増加率と研究数は単なる「流行り」の概念の枠をすでに超えており、これらを含括できる大きなテントが必要であると結論づけている。

そこで今日の日本心理学会全体を傍観すると、宗教やスピリチュアリティをテーマにした実証研究発表が近年特に増加している。さらにこれらの概念が曖昧で怪しいという反論について言うならば心理学の根源概念である「心」はどうだろうか？如何せん日本の心理学会においては「心とはなんぞや？」というような形而上的議論があまりなされなかった土壌が、宗教のような可視化しにくい概念に対する偏見と関連しているのではなかろうか？心理学はデータを用いて普遍化や一般化を目指す学問である一方で、**科学者自身の創造性と理論で「知識体系を確立する」という認識論的側面が重要である**。例えば「科学の王様」と言われる物理学でさえ可視化できない時空の起源について実証的手法で理解するように、心理学においてもヒトの心や宗教性・スピリチュアリティを実証研究の対象にするには何ら問題がないばかりか奨励されるべきである。そのことは研究者としてだけでなく教育現場でも学生に再

度強調するべきだと思う。

ユダヤ・キリスト教的枠組みからの脱構築

日本の宗教心理学が今後どのように既存のユダヤ・キリスト教的枠組みから脱構築(そして再構築)するかという議論を聞いていると「枠組み」自体からの脱構築ではなく、その一部だけを取り替えることに終始しているように思える。例えば「天国」や「祈り」という概念や行動はユダヤ・キリスト教徒の日常生活に大きな位置を占めるものであるが、それを日本の文脈において「極楽浄土」と「写経」に置き換えることが脱構築と言えるか、ということである。脱構築というのは既存の「枠組み」(特に神仏に対する考え方や日常での付き合い方)全てから解き放たれることではないだろうか？例えば宗教がアメリカにおいては道徳や政治的思想に大きな影響を与えることはよく知られているが、日本の場合はどうか？これらの思想に影響しているものは何か？もし宗教的影響があまりないとすると(例:儒教)それは「既存のユダヤ・キリスト教的枠組み」外のものではあるが、果たしてそれを宗教心理学の研究と言えるのか？また特に日本においては「宗教 vs 思想」の区別すら愚問ではないか等々である。つまり「脱構築」とはユダヤ・キリスト教的な宗教という考え方から一度離れて、日本独特の民族的慣習や行動を観察・解釈して新しい枠組みを掘り起こすことではないだろうか。そういったプロセスを経ることが日本独自の宗教性に関する行動や意味づけの発展につながるのではないかと思う。

実証研究を行う宗教心理学者にとって宗教的専門知識は必須なのか

もう一つの論点は実証研究を行う心理学者にとって宗教的専門知識が必須であるかということであった。答えは「yes and no」(どちらとも言えない)であろう。もし実証研究の内容が宗教的専門知識に関することであれば研究者がその知識を持つことは当然必要であろう。例えば人口の7割ほどがユダヤ・キリスト教徒であるアメリカで、旧約聖書ヨブ記の知識なしに宗教観と人生における苦難の対処法との研究を行うことには無理

があるかもしれない。しかし、人がどのように宗教的事象と向き合うか、つまり宗教に関する我々の心理的構造・機能を研究する場合は特別な宗教的知識がなくても研究することは可能であろう（例えばヒトと神仏の繋がりの強弱や、日常におけるスピリチュアルな経験について等）。よく言われることであるが、知恵やインテリジェンスという概念の研究者自身が被験者より高いレベルの知

恵やインテリジェンスを持つことを必須としないということに似ている。さらに日本の場合、宗教心理学という層の薄い分野で宗教的知識を研究者や学生に求めてしまうことはこの分野におけるハードルを上げてしまう懸念もある。少なくとも現時点では門戸を大きく広げて構えた「テント」の方が日本における宗教心理学の発展という意味ではいいように思う。

応用心理学の立場から見る宗教と心理学の連携可能性

－互いへの期待を考える－

今城志保(リクルートマネジメントソリューションズ:非会員)

シンポジウムでは、連携・協力の可能性のある様々な分野の先生方から刺激的な情報共有があった。自身の研究領域が産業組織心理学という応用心理学であるため、松島先生の提案された「概念(思想)⇄実証(データ)⇄現場(実践)」の要素間のバランスの難しさに共感する部分も多くあった。

心理学者の立場からは、宗教にまつわる心理も、働く人の心理も、心理学的興味関心であったり、研究目的によって扱う状況が異なるだけである。そして宗教に関わる状況に着目することで、研究が可能になる心理があるからこそその連携の呼び掛けだろう。一方で、宗教や宗教学の研究者の方から、心理学者に期待することが何かを質問させていただいたところ、実証データに基づく検証への期待をうかがうことができた。また心理学への期待というよりも、宗教学を始めとして社会科学の他分野では、心理学が懐疑的にみられる場合があることが指摘された。研究から主張できることの限界は、多くの心理学者が認識している。後者の指摘については、他分野の研究者

とのより丁寧なコミュニケーションが必要だろう。

もう一つ印象に残っているのが、「心理学者はどの程度宗教のことを知る必要があるのか」との質問である。宗教に関わる際に、おそらく多くの心理学者が気になっていることだろう。その結果、「興味がない」「自分にはよくわからない」などの発言につながっている気がする。心理学者はデータや情報の解釈を大きく誤ることのない程度には、宗教を理解すべきだと思う。ただその先の解釈こそ、宗教の専門家と連携することが、科学性を担保するためにも必要だと考える。

心理学では、心理という実態のないものを研究対象としつつも、科学的であることを追及するために定義や測定にうるさくならざるを得ない。このような状況を鑑みると、宗教のすべてを扱うことは不可能である。その限界を理解したうえで、宗教の中に科学的に再現性を示したい人の行動や思考に関する現象があるのであれば、双方に利のある連携は可能だと考える。今後の展開に期待したい。

『宗教心理学的研究の展開(18)ー宗教,スピリチュアリティを追究するための「新たな連携・協働」の試みー』 ーディスカッションを通じて感じたこと,考えたことー

太田俊明(土御門殿御菩提所梅林寺 副住職)

【はじめに】

今回は当初より web での開催になった。背景としては新型コロナウイルスの蔓延が挙げられると思われる。ただ、内容的には臨場感があり極めて濃く充実したものになったと言える。本ディスカッションでは宗教学・宗教と心理学との間における新たな連携・協働を行うためにはどのような方法論と関係性を持つことが望ましいか。その方法論と関係性はどのようなものなのか。これらについての考察と対話が行われたと考えている。(ディスカッションでのパワーポイントからの直接引用は「」で表現した。)

【昨今の状況】

～科学技術基本法から科学技術・イノベーション基本法へ～

令和三年四月に「科学技術・イノベーション対策基本法」に変更された。今回の法改正における最大の変化は「単に人文科学(社会科学を含む)のみに係るものを除く」文言が削除されたことである。このことは国家の科学技術政策に「人文科学のみ」の分野が入ることを意味する。このことが宗教心理学にとって何を意味するのか。

宗教心理学は学問的に心理学的見地から係るもの(人文科学+統計学+精神医学を中心とする)及び思想史を中心とした見地から係るもの(人文科学・社会科学を中心とする)の両面から成り立っているものと考えられる。従来は科学技術政策には前者のみであったが、本年度からは全体に拡大される。このことは宗教心理学全体が科学技術政策そのものにかかわることを意味する。そこで、方法論を含めた原理原則の見直し・分野分けの検討は今後に向けて活かされるものと考えられる。

【発表者に対する質問と太田が考えたこと】

★藤井 修平氏

藤井氏は基本的に心理学的観点からは量的観点から、宗教学的観点からは質的観点からとらえているものと考えているように受け取った。これらの違いから、宗教を心理学的観点から研究することは対象にならないと長年されてきた。解消を図るためには宗教と心理学との間における連携が不可欠であり、連携を踏まえたうえでの成果が必要となる。

そこで「なぜ宗教なのか」「宗教学との連携をどのようにするのか」に関する事柄を中心に論じられた。宗教の定義は幅広く、特定信仰だけでなく、多重的な感覚的な信仰も含まれる。「非宗教的な思考や行動に用いられている能力や傾向性が、同時に宗教的な思考や行動にも用いられていることが明らか」とすることもこの証左とし、以下の3点を結論付けた「1. 関わるべきでない研究を認識し、自らの研究姿勢を明確にする。2. 幅広い宗教の概念を採用することで、宗教に関連する要素は今でも大きく関わっていることを示す。3. 宗教は特別な研究方法を必要とする特別なものではなく、日常的な活動の延長だと理解する。」。これらの点は十分に理解できるが、「幅広い宗教の概念」とはどうだろうか。複数の宗教的視座を指すのだろうか。それとも他の分野の学問的概念を指すのだろうか。

これらのやり取りを踏まえた私見として以下の4点を提示したい。

1. 基本的に宗教学(仏教学等含む)は統合学ではないか。この観点をどのようにとらえているのか。
2. 陰陽道ブームをどのようにとらえているのか。暦法からのアプローチに宗教心理学はどのようにとらえていくのか。
3. 研究姿勢について当初は試行があるため

様々な切り口が必要であると考え。そこから徐々に研究姿勢を明確にすればいいのではないか。

4. 結論の3点を行うためには「原典の現代語化とケース事例化」が必要であると考えがどのようにとらえていくのか。

これらの解消案として自らの研究姿勢を明確化するだけでなく、他の研究分野の受け入れと、ネットワーク化の構築が必要でないだろうか。それらを踏まえての結論となればよりスムーズに宗教学・特に思想史サイドの受け入れは進むものと考えられた次第である。

★大橋 明氏

大橋氏は日本の超高齢化社会の現状を踏まえたうえで「社会でも宗教的なものに対して関心が向けられるように」研究は進みつつあることを提示した。そこには「ありがたさ・おかげの認識」「宗教的もしくはスピリチュアルな態度」という2つの観点があり、過去の研究成果を踏まえ両者への分類分けを行った。結果「一人で祈るもの・礼拝に高頻度に参加する者」への精神状況が良好なこと。「加齢とともに、死への不安に対する「宗教的希望」の緩衝効果が大きくなり、「深心」が高い者ほど精神的に健康」であることを紹介した。氏の分野に関しては太田も過去に職業としてかかわっていたこともあり、共感的な感覚を受けた。このため、疑義質問等に関して取り上げる箇所はあまり見られないのが正直なところである。ただ、氏の語った「分野外の専門用語のわからなさ」に関しては様々な分野の方が当研究会に所属しているので、もっと聞いてほしく思った。そうすることにより、研究会内部のコミュニケーション増大や研究交流の促進につながると思われるからである。また、読者にも寛容の精神で教示しあえる関係づくりをお願いしたい次第である。

★西脇 良氏

氏に関しては南山大学付属小学校での実践を取り上げているところが主となっている。地域の概要は省略させていただき一斉休校中の児童の絵画を中心に感情を吐露させる試みおよび、休

校明けの対策を説明したのち、宗教教育の概要とカリキュラムの紹介を行い、最後に地域との連携・協同の可能性について語った。

私的には初等教育における宗教教育と宗教心理学との関係について、かつて檀信徒様から宗教を子供に教えるのは早すぎるのではないかと否定的な意見をされたことがあり、興味・関心を持っている所であった。氏の発言を通じてコミュニティの変化が一つのキーワードになると考えさせられた次第である。

★ムスリン・イーリヤ氏

イーリヤ氏は「1. 文化の違いや宗教の多様性に関する意識の重要性」においてアメリカを中心に学問が展開しており、宗教心理学上における様々な問題を研究しようとする際、まず北米に目を向け、成果等の確認した上で研究をスタートさせる。しかし宗教研究に関しては言語的な内在性と概念の相違から西洋研究者の研究プロセスを模倣する場合「大きな過失を犯さざるを得ない」ものとなる。そのため、「学問的に厳密かつ日本文化を研究背景にした研究を行うため、自文化中心性や文化の違い、信仰の多様性に関する意識が必要」と認識される。しかしながら従来、北米の概念を土台に据えた研究者の論文を権威化し、我々が無反省に導入してきたのではないか。そして無意識的に偏った学問を輸入し、その反動として自国中心主義の底流につながったのではないか。というのは文化的多様性に関する意識の欠如は我々の問題にもなるからである。そのうえで「2. 日本における宗教概念について」の項目で宗教における研究対象自体にコンセンサスが取れているわけではない。その理由として宗教研究者の認識として、必ずしも体系的で組織的なもののみではなく、かつ諸宗教の要素を含んだものという概念が挙げられる。また「3. 「日本人論」という畧」の項目において北米の傾向一辺倒の流れに対する反動的側面が考えられるが、それらの言説の多くは学問的な根拠のない文化的民族主義かつ主観的のものである。それをふまえて客観的な学問を目指すなら、文化的民族主義的な表現は使用すべきでもないとした。

そこで氏の見解からは宗派学のあり方そのものが問題として生じてくるのではないか。宗派学(というか神学)の基本的認識はおのずから信仰している対象ひいては祖師(開祖等)の宣揚にあり、その学問体系の再確認と研究に主眼が置かれる。したがって祖師(開祖等)の信仰体験・経験に基づき、その体験・経験に基づくか、もしくは依拠する聖典(経典・論書)を通じて信仰に接していく性質のものである。そこには客観的かつ科学的な側面が仮に存在するとしても体験・経験が伴うために自らの主観を抜きに語るができない性質のものである。また布教等を通じて社会にアプローチすることを通じて他の学問視座を通じたところで同一祖師を基にした集団による主観の集合体になり、究極的には個々の主観を抜きにして成立しない。それは自宗派中心主義からの振り返りは(異端の概念も加わる場合もあるので)検証困難になる側面を持ち、ひいては文化的民族的側面と同一構造に陥りかねない。つまり構造的枠組みについて欠けかねない側面を持つということが個々の宗派学にはあるということを目指す。したがって宗派学の内実はどこまでも突き詰めても主観のところに立ち返り、主観を通じて祖師の主観を学問的に追及するので文献学等で客観性を装ったところで突き詰めれば主観性に繋がるのではないか。

その解消策として太田は一つ提案したい。それは臨床心理学で活用されている構造を活かすことである。構造を活かすことによりライフコース的な観点の視座が可能となり、宗派学も過去における教相判釈ではない平準的な観点到に落居することに繋がる。ひいては「個々の教団を超えた」もしくは他教団間における宗派学での客観的視座が成立する余地も生ずるのではないだろうか。宗派学をライフコースで分けてみて対機説法化とすることこそこれからの宗教に必要であろうし、宗教心理学がその主たる役割を果たすのではないだろうか。また今回の議論で欠けがちであった視座の補充にも通じると考えられるのだが如何だろうか。

★ Masami Takahashi 氏

Takahashi 氏は指定討論者の観点から 4 名のパネリストをまとめていただいたこと御礼申し上げます。ただ、太田から見て数点気になった点があり、その点を中心に述べていく。一点目としては図示されていた概念が挙げられる。概念(思想)と現場(実践)との間も実は相互関係にあり、宗派学の立場からではその会通性こそが最重視されることが挙げられる。それは「概念→(教学の主體的解釈)→現場・現場→(教学的認識を通じたフィードバック)→概念」というもので、両者のやり取りによって教学の客観性とライフコース化に繋がることは考えられる。二点目に概念と実証は会通するものの、現場は一方的な方向に終始している点である。これも相互理解の観点からは如何だろうか。三点目は「信じることだけが宗教なのか」ということが挙げられる。宗教的体験は特定の体系を信仰するだけでなく「何となく」自らを超えた・超越した存在を感じていることもあると考えられる。特にキリスト教や神道ではその対象を神、浄土思想では阿弥陀仏と表していると考えられる。

これらを踏まえて宗教性・スピリチュアリティが成立するように考えられるのであるが、如何であろうか。

【まとめ】

企画趣旨に挙げられた「概念(思想)⇔実証(データ)⇔現場(実践)」であるがこれに加えて「概念(思想)⇔現場(実践)」を口頭で加味されていた。ただ、図ではわかりにくく、欠落しているように思われたのが残念なところである。「概念(思想・教学)→現場(実践)」は言語的・非言語的な思想的敷衍があり「概念(思想)←現場(実践)」は教学言語の現代語化が挙げられる。この理由として言語表現自体時代に応じて変化するものであり、特に現代はメディア発達等の影響がありその流れは加速している。太田が指摘したい点はディスカッションで欠けている部分の指摘と展開であった。当然リプライではこの点に触れていたことは言うまでもない。

また宗教の現場と宗教学と心理学は必ずしも

同一の次元に立つ必要はないと考える。むしろ学問同士と現場が相互に会通し、相互交流・協力の関係を構築することが重要なのではなからうか。このことこそ、昨今の国内法改正の流れとも一致し、方法論を含めた原理原則の見直し・分野分けの検討を通じて、宗教(スピリチュアリティ)心理学の発展と深化・進化が進むものと考えている。今後とも原理・原則研究の方向性を期待したいし、相互交流と協力の関係性作りを行うとともに、私も進化かつ深化した研究を行ってい

きたい。

【参考・引用文献】

信楽峻磨[2010]『真宗学概論 真宗学シリーズ 2』法蔵館
 浄土宗大辞典編纂委員会[2016]『新纂浄土宗大辞典』浄土宗
 ドナルド・K・マッキム(著)高柳俊一 熊澤義宣 古屋安雄(監修)[2002]『キリスト教神学用語辞典』日本キリスト教団出版局

「宗教」ーアンケート調査の継続課題

ミカエル・カルマノ(南山学園聖園女学院高等学校・中学校)

『宗教心理学的研究の展開(18)ー宗教, スピリチュアリティを追求するための「新たな連携・協働」の試みー』の会合に参加して、我々の目と耳が現実を客観的に取り入れることと、見つけたことを誰にでも理解できる言葉に変えることには限界がある、と私は感じた。

「宗教」と言っても、自分を育てた「宗教＝キリスト教」と「母語＝ドイツ語」は、無意識的に、物事を理解するための枠組みとなっている。場合によって、この枠組みは他の宗教と言語を正しく理解することを妨げる偏見にもなりうる。具体的に、自分の宗教の枠組みから出る質問に基づいてアンケート調査を実施しても、相手がもっている「宗教観」に対して的外れになる可能性は否定できない。

図を作成するときに長さの単位としてインチを使うか、センチメートルを使うかによって、同じ図であっても、頭に浮かんでいる大きさのイメージは大分違ってくる可能性はある。しかし、インチをセンチメートルに変える客観的な計算式があるので、現実を正しく理解できる妨げにはならない。

Michio Kaku の著作, "The God Equation" (1)は String Theory (弦理論)で宇宙の全てを説明しようとする試みである。宗教心理学研究会の研究対象は「宗教」であるが、一つの客観的な理論で分析・説明しようとする試みへの取り組み

にとって Michio Kaku のアプローチは参考になるのであろうか。私達は宗教現象を客観的に測定・分析・定義できる理論の構築を求めるときであろうか。やはり、宗教現象をアンケート調査等で計ろうとするときには、弦理論に相当する計算式はないかもしれないという共通の認識は、宗教心理学の研究には欠かせない、と私は思う。

Eriko Ogihara-schuck(2)の博士論文, "Miyazaki's Animism Abroad"は一つの方向性を示している気がする。宮崎駿の映画(「となりのトトロ」「もののけ姫」「千と千尋の神隠し」)の英語版を作成したときに編集者は最初に、ユダヤーキリスト教的背景を持っているアメリカ人には分からないだろうという理由で、いくつかの場面を削除した。しかし、キリスト教と日本文化の特徴とされているアニミズムは対立しているという、慣習的な考え方を超えて、アメリカとヨーロッパの観衆は最終的に宮崎駿の原作はこのままで受け入れられるようになったーこれは Ogihara-schuck 氏の結論である。

対立の中でも共通の理解があるという発見を、どのようにして宗教現象を客観的に把握できる計算式、偏見のない言葉を使う質問に変えることができるのか。宗教性・スピリチュアリティを実証的に研究しようとするプロジェクトにとって継続課題ではないか、と私は思う。

- (1) Kaku, Michio "The God Equation: The Quest for a Theory of Everything," Doubleday, 2021.
 (2) Ogihara-schuck, Eriko "Miyazaki's Animism

Abroad: The Reception of Japanese Religious Themes by American and German Audiences." Mcfarland & Co., 2014.

「宗教心理学的研究の展開(18)」のディスカッションに参加して

河村 諒(関西福祉科学大学)

私は医療・看護や福祉の現場における宗教や宗教家の意義、有用性について関心を持っています。現場での宗教の実践には他分野、他職種との連携や協働は不可欠だといえます。そのような中、『宗教心理学的研究の展開(18)－宗教、スピリチュアリティを追究するための「新たな連携・協働」の試み－』のディスカッションが行われることを聞き、参加させていただきました。

4名の先生の話題提供を通して指定討論がなされました。どのように宗教を実践につなげることができるだろうか、その効果を実証できるのだろうかという私の悩みや疑問に対して、どの先生のお話も非常にためになる、あるいは考えさせられるものでした。その中でもディスカッションの感想として、大きく以下のような3点がありました。

まず、宗教の定義についての問題です。先日、スピリチュアルケア(宗教的な関わり)に関する質問紙調査に協力いただいた高齢者施設に、調査の結果報告を行う機会がありました。その際、「宗教」ということから調査に協力しづらい施設や職員がいるのでは、という指摘を受けました。このようなご指摘はこれまで何度もいただいはきました。その度に、調査の同意書等にある程度説明はしているものの、抵抗のない説明とはどのように行えばよいかと悩みました。一方で、質問紙の自由記述の欄には「宗教はとても大切だ」「利用者にとっても職員にとっても意義がある」といったコメントも散見されました。また、実際に質問紙を見たら宗教というよりも「日本古来の習わしであり日常的なイベント」だったというコメントもありました。ディスカッションでの藤井先生やTakahashi先生のお話を踏まえ、宗教の定義をどのようにするか、臨床の現場や利用者、職員に

とって理解しやすく共有でき、共通する宗教の定義はどのようなものなのか、そこに宗教学との連携の必要性があると感じました。

次に、宗教やスピリチュアリティを測定する尺度についての問題です。宗教(スピリチュアリティ)の尺度の質問項目は対象によって柔軟に変えることができるものの方がよいのではという話がありました。その際、他の参加者から対象者によって質問項目や因子が変わってしまうとその尺度は不安定ということになりよくないのでは、という意見もありました。私もこれまで、調査で宗教性やスピリチュアリティを測定する尺度の使用を検討していた際、同じ尺度でも対象者によって質問項目が少し変更されている尺度を見つけ、使用を悩んだことがあります。同じ質問項目ではない、あるいは因子ではなくなると、他の調査や研究と比較することが難しくなるのではと考えたからです。一方で、発達段階や団体によっては宗教性やスピリチュアリティは異なると思います。そのため、対象間の比較を行うといった場合は質問項目を変えずに(つまり柔軟性を持たせずに)同一の尺度を用い、対象の特性をみる場合は「○○向け尺度」(例えば「高齢者向けスピリチュアリティ尺度」といった対省別の尺度を用いるのはどうか、ということも思いました。この尺度の問題も概念、実証、現場という視点で幅広く検討していく必要性があるとも感じました。

最後に、臨床での実践についての問題です。

「宗教の定義を決め、また、実証的に宗教が高齢者施設においても有意義であることが示されてきた」

「このような宗教観、スピリチュアリティ、死生観

が精神的健康に影響しそうだということがみえてきた」

これらを踏まえて現場に還元(実践)するぞとなった時に、場合によっては特に宗教家のお話、利用者からの質問での対応において定義された「共有的な宗教」から一歩進んで特定の宗教を踏まえたお話をする場合もあるかと思えます。ディスカッションで、ある参加者が「宗教の原典から事例釈へ」という話をされていました。この視点がポイントなのかなと思いました。実証された内容を踏まえ、あくまで原典をもとに利用者にその解釈を展開する、という方法です。以前、宗教学の

先生に「宗教を利用するな、都合の良い解釈をするな」というご指摘を受けたことがあります。そういう点でも原典から事例釈という流れも難しいのかとも感じました。しかし、松島先生からご意見もありましたが、宗教、特に教義の解釈も多様です。だからこそ、宗教学と連携・協働し、間違っただけあるいは独善的や極端な解釈に陥らないよう確認しつつ、しかしながらその人や状況に適った解釈を行っていくことが必要であると感じました。

雑多な感想になってしまいましたが、今後とも皆様と学びや気づきの場を共有させていただければ幸いです。

日本心理学会第 85 回大会シンポジウム宗教心理学の研究の展開 (18) — 宗教, スピリチュアリティを追及するための「新たな連携・協働」の試み — の振り返りミーティングに参加して

壽崎かすみ(龍谷大学:非会員)

日本心理学会第 85 回で開催したシンポジウム「宗教心理学の研究の展開(18) — 宗教, スピリチュアリティを追及するための「新たな連携・協働」の試み」の振り返りミーティングが Zoom を使ったオンラインで 9 月 26 日に行われました。日本心理学会でシンポジウムが開催されたときの登壇者、藤井修平先生(東京家政大学)、大橋明先生(鈴鹿医療科学大学)、西脇良先生(南山大学)、ムスリン・イーリヤ先生(立教大学)、Masami Takahashi 先生(Northeastern Illinois University)が揃い、松島先生の進行、聴講者とのディスカッションも含めての開催でした。

今回、松島先生からこのミーティングの感想を依頼されましたが、私の専門は宗教学でも心理学でもありません。工学部で学び都市計画を専門としています。ただ、私自身がプロテスタントのクリスチャンで、日曜日には礼拝を守る生活をしているので、宗教に対する興味・関心は平均的日本人よりあるのではないかと自分では思っています。今回は、学問的には第三者(素人)の、ひとりのクリスチャンが自分の人生や研究上の経験に

重ねての感想ということで、至らぬところはお許しください。

今回のシンポジウムは宗教学と心理学が連携・協働するには「何が必要か」がテーマと伺いました。しかし、素人の私には宗教学と心理学が連携していない(あるいは連携が不十分な)ことが驚きでした。信仰が人間の行動に大きな影響を与えることは、私自身のことを振り返ると明らかだからです。日本で伝道活動をするプロテスタントの米国人宣教師が「進化論は間違いである。聖書に書いてあることを否定している。」というメッセージを、自信をもって語る姿に、ある種の怖さを感じたことがあります。私には、そのメッセージをそのまま受け入れる信仰はありません。しかし、それも宗教のひとつの姿です。

藤井先生が宗教の概念は捉えにくく、定義が 50 以上あると話されました。イーリヤ先生は米国の宗教心理学の研究はキリスト教、それもプロテスタントを基本にしているものが多く、日本人にそのまま当てはめることはできない。しかし、日本人の宗教観が特殊なわけではないと話されまし

た。

何が宗教かということに対する日本人の認識は、個々人の生育環境などの影響が大きいように思います。初詣、七五三などで神社やお寺に詣でも、慣習であり宗教ではないと認識している人も多いようですが、これを宗教行為と考える日本人もいます。

私自身、研究の一環で「神社の祭りを宗教行事と考えるか」を取り上げたことがあります。都市計画の研究のひとつに、地域づくりあるいはまちづくり活動への住民参加ということがあります。そして地域づくりのために、その担い手としての自治会や町内会、その活性化に話がつながることは少なくありません。自治会や町内会の活動の活性化のために、地元の寺社の祭りを利用するというがよくあります。しかし、このシナリオで寺社の祭りを考えるときには、宗教行事という側面、あるいはそのように考える人の存在は忘れられています。「伝統行事」あるいは「地域の行事」という言葉で参加を促すケースが多いようです。このことについて、京都市内のキリスト教教会の神父・牧師などの聖職者にアンケート調査を行ったことがあります。キリスト教の聖職者でも寺社の祭りとの距離の取り方にはバラツキがありました。

日本人と宗教の間にあるこの感覚、これが心理学からの量的研究、そのための質問紙作成や尺度の設定を難しくしているのは事実だと思います。その一方で、そこに日本人の宗教あるいはそれに類する行動について、心理学の視点から分析することの醍醐味があるのではないかと感じます。

藤井先生は宗教学と連携することで「ふだん宗教と思われていないものに宗教的要素が見いだせる」と指摘されました。また、宗教的現象と非宗教的現象の双方の理解に資する、宗教と特徴を共有する現象に宗教の知見を応用することができるとも指摘されました。

大橋先生は高齢になると宗教、あるいはそれ

に類することへの心理的距離が近くなると話されましたが「死」が近づくことに対する日本人流の適応のようにも思えます。

西脇先生の「生命・死の問題への対処」は本来、子ども時代から育むべき内容だと感じました。教育の場での実践のひとつの方法として「道徳」教育の中の「宗教的情操」が位置づけられると伺いました。日本社会での宗教のプレセンスの低さを考えるとき、教育、特に義務教育の課程の中に宗教を位置付けていくことは重要だと思います。

宗教の概念は把握しにくく、宗教の定義の幅が広いということに戻りますと、それが宗教の特徴であり、その特徴ゆえに「宗教」の概念をできるだけクリアにしないと個々の研究を進めることが難しいということになります。自らの研究対象をクリアにすること、研究姿勢を明確にすることは他の分野でも重要なことだと思いますが、特に宗教を扱うときには注意が必要であるということがわかりました。

多くの日本人にとって宗教は慣習などとして日常的な活動に含まれています。それが研究対象をクリアにすることを難しくしています。日常生活を調査することが難しいことは都市計画、建築系の調査についても言えることです。まして心理学の調査となると、調査の設計自体がとても難しいことは想像に難くありません。しかし、それをするこではじめて、宗教に関連する要素を取りこぼしなく、丁寧に拾い上げていくことが可能になる。ここで、藤井先生のまとめと、Takahashi先生の指定討論のまとめが重なると考えます。

カトリックは世界中に布教するため、各国、各地域の慣習をとりこんでいると聞いています。日本のカトリック教会では七五三に代わるミサ、家を建てるときなどに行われる上棟式に代わるミサなどがあると聞いています。日本人のなかにある何かを納得させる必要があるということかもしれない。そういったことも含めて、研究成果を伺えることを期待しております。

宗教性・スピリチュアリティの操作的定義に関わる議論について

辻本 耐(南山大学社会倫理研究所)

日本心理学会第 85 回大会において、本研究会主催の公募シンポジウム『宗教、スピリチュアリティを追求するための「新たな連携・協働」の試み』が開催された。本シンポジウムでは、理論の構築や概念整理を行う人文科学分野、理論に基づいてデータを集める社会科学分野、得られた知見を社会に還元していく実践・臨床分野で活躍されている 4 名の先生方から、宗教心理学における「新たな連携・協働」のために必要なものは何かについて話題提供をいただいた。

また、今回の大会はオンライン上での開催であり、参加者とのやり取りはコメント欄に限定されていたため、質疑応答を含めたディスカッションを直接行うことができなかった。そこで、後日、研究会内でこれらの話題についてあらためて議論する場が設けられた。ご登壇いただいた先生方は、シンポジウムを終えてホッとされていただろうが、一息つく間もなく、同じ内容で再びご発表いただくことになった。貴重な機会を設けていただいた松島先生、4 名の先生方、指定討論の Takahashi 先生には、この場をおかりして感謝を申しあげたい。

さて、近年、スピリチュアリティやマインドフルネスに注目が集まり、宗教を科学的に捉えようとする傾向が盛んになってきた。こういった実証的研究の流れを踏まえて、本研究会の中でも、「ユダヤーキリスト教的文脈の脱構築を試みる宗教性／スピリチュアリティにおける実証的研究」というプロジェクトが動き出している。このプロジェクトでは、日本文化に即した「宗教性、スピリチュアリティを追求するための」測定方法を確立すること、つまり、実証的宗教心理学研究のための尺度開発が目標の一つとなっている。現在、これまでにわが国で作成された宗教性・スピリチュアリティに関する尺度の整理を行い、それらのどの側面に注目し、どう定義づけるのかについて議論し始めたところである。私もこのプロジェクトに関わらせていただいているが、日本の宗教性・スピリ

チュアリティの操作的定義がどれほど厄介な作業なのかをよく知っている。そのため、本シンポジウムの中でも、特に人文科学分野の先生方からご指摘のあった定義づけに関する話題を興味深く聞かせていただいた。

宗教心理学における定義づけとは、自らが関わるべきではない怪しげな研究（UFO や超常現象など）を認識し、自らの研究姿勢を明確にする（藤井先生のご発表より）ために、研究対象になり得るものを絞り込んでいく作業である。一方で、その作業に際しては、キリスト教における神概念を中心に据えた欧米文化との差異を意識し、自国の文化や民族が特殊であるという主観的評価に注意を払いながら、非組織的な宗教や個人のモザイク的な宗教も考慮しなければならない（ムスリン先生のご発表より）。つまり、研究対象を取捨選択しながらも、さまざまな宗教（もしくは宗教的なもの）における共通性と差異をくみ取って、幅広く客観的な定義へとソフトライディングしていく必要がある。しかし、研究対象をどのように絞り込むのかという判断基準は定かではなく、「幅広く」と一口に言っても、宗教がカバーする範囲はあまりに広大である。そう考えると、プロジェクトも出だしから前途多難である。

しかし、指定討論の Takahashi 先生より、この困難な作業を行うにあたって、①論文上で概念定義を明確に示す、②一般的な定義との乖離を避ける、③概念（操作定義）の共通理解を強制的にではなく柔軟にする、という 3 つの示唆的なコメントをいただいた。私はこれらの指摘の中でも、特に「柔軟に」という言葉に魅力を感じている。先生の真意は分かりかねるが、私なりに解釈すれば、「定義に縛られすぎず・こだわりすぎず」といったところであろうか。Takahashi 先生のこのコメントを聞いて、何やら気持ちが軽くなったというのが正直な感想であった。

とはいえ、このプロジェクトでは、宗教性・スピリチュアリティの定義に関する何らかの結論を出

さなければならぬ。そして、実際に調査を行い、仮説通りの結果になっているのか(日本の文化に適したものになっているか)を確認することも求められている。一般的な手続きであれば、コスト面を重視するため、予備調査を1回程度実施し、その結果を踏まえて本調査へという直線的な流れになるのであろうが、宗教性・スピリチュアリティを研究対象とする場合、それほどスムーズには進まないのではないかと思っている。今回のような場合、①定義に関する議論を詰めたいので、まずは暫定的な定義を決める、②その定義に基

づいて測定内容を考え、実際に調査をして結果を確認する、③修正すべき部分を見つけて、①の定義の議論に戻して再び②・③へ、というサイクルを試行錯誤しながら何度も繰り返す円環的な手続きが必要となるかもしれない。

こういった過程には大変な根気と労力が必要であると承知しているが、私自身、このプロジェクトを大変楽しみにしている。今後、さらに研究会内およびプロジェクト内の「連携・協働」が進み、活動・議論が活発になることを期待したい。

「宗教」と「心理学」の往還、橋をかける宗教心理学研究

森本真由美(上智大学大学院神学研究科)

9月に開催された研究発表会は、日本心理学会でのシンポジウム(宗教心理学的研究の展開(18)―宗教、スピリチュアリティを追求するための「新たな連携・協働」の試み―)の振り返りミーティングとして、学会のラウンドテーブルと同様に、松島公望先生の企画・司会のもと、宗教学(概念)を藤井修平先生、老年心理学(実証)を大橋明先生、小学校現場(実践)を西脇良先生、さらに「新たな連携・協働」についての注意すべきこととしての「自文化中心主義」という話題提供をムスリン・イーリヤ先生。最後に、Masami Takahashi 先生の指定討論と、学会でご発表してくださった内容を伺うことができました。

私が取り組んでおります研究の課題もまさにこの「新たな連携・協働」を行っていくことで、本研究会の先生方のご発表とディスカッションで、改めて「新たな連携・協働」の難しさと、そして「新たな連携・協働」の希望を感じました。私は発達心理学の分野で宗教性発達を学位論文にまとめましたが、研究成果を実践の場に還元したいとの思いから、「連携・協働」先である「神学」の学びの場に学部編入をし、現在大学院生として籍を置いています。上智大学の神学部は日本で唯一のカトリック神学部で、大学院ではローマ教皇庁認可の学位(STB/STL/STD)を取得することも

できます。

「神学」という学問は信仰体験が前提で、それを哲学などの学問用語を用いて体験を現わすもの。またそのような信仰体験のない人にも伝えていくというスタンスの学問です。したがって、まず哲学から学び、次に神学を学ぶというのが正しい学び方になります。「神学」と「心理学」は研究のアプローチが大きく異なることから、当初は対話がまったくかみ合わず「連携・協働」は難しく感じていましたが、「神学」と「心理学」を往還しながら、徐々に「連携・協働」の場が見えてきたように感じます。それはミッション校という【実践】の場の問題に焦点を合わせた「連携・協働」です。

私の研究テーマはミッション校における、キリスト教ヒューマニズムという建学の精神が一般学生にとってどのような意味を持ち、どのように人間の変容に繋がっていくのかというものです。これは「神学」的にも重要なテーマですが、教育効果を測る以上、発達心理学的な視点やアプローチも必要となってきます。偶然にも、大学内でキリスト教ヒューマニズムをどのように考え、どう教授していくのかというプロジェクトが立ち上がり、そのメンバーとして授業評価や心理尺度開発など、イノベーションとして【実践】することを前提に、【実証】を行い、さらにキリスト教ヒューマニズムと

いう【概念】を今日的に整理するという、取り組みに関わることになりました。イノベーションは橋渡し型社会関係資本で生じます。つまり立場が異なる人々の「新たな連携・協働」によって生まれます。その異なる人々を橋渡しするのが【実践】の場の問題、なのかも知れません。

実はアメリカにおける神学会では、「神学」と

「社会学」、「神学」と「心理学」、「神学」と「経営学」などの研究は数多くあるそうです。しかし、日本では研究者が少ないことからなかなか取り上げられないという事情があります。日本の「神学」の研究領域を広げる一つになることを願って、今後も「神学」と「心理学」研究に取り組んでいきたいと思っています。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第33号が発行されました。今回の内容は、日本心理学会第85回大会公募シンポジウムの報告、振り返りミーティング、発表者・参加者からの感想となっております。

日本心理学会第85回大会はオンライン開催となり、公募シンポジウムはオンデマンド形式で行われました。そのため、参加者と直接議論する機会を持つことができませんでした。

せっかく行ったシンポジウムにもかかわらず直接議論ができないのはとても残念に思い、改めて「振り返りミーティング」との場を設定し、そのミーティングにて今回のテーマ「宗教、スピリチュアリティを追求するための『新たな連携・協働』の試み」について議論する機会を持ちました。そこで行われた議論の内容は「振り返りミーティング報告」として掲載しています。やはり直接議論できるというのはとても意義があることを思いました。私自身も「振り返りミーティング」にて多くのことを得ることができました。

それ以外の記事もとても示唆に富んだ内容になっています。それらの記事を通して、皆さまにとっても「宗教、スピリチュアリティを追求するための『新たな連携・協働』の試み」について考える機会となれば幸いです。そこからまた新たな一歩へとつながっていくことを願うばかりです。

今回のニューズレター第33号を始め、これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M.)

【宗教心理学研究会の今後の予定】

2022年9月8日(木)～11日(日)

日本心理学会第86回大会公募シンポジウム(第19回研究発表会) ハイブリット開催を予定

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページ管理・運営

担当: 藤井修平 [yrsk.f@nifty.com]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/